

論文と資料紹介

論文

国士館と嘉納治五郎

岩間

浩



はじめに

嘉納治五郎（一八六〇—一九三八）といえば、日本国内はもとより海外でも柔道の創始者としてその名が知られている。その嘉納が国士館の教育に積極的に関与したことを知る人は、国士館においても、体育学部との柔道関係者の一部以外にはわずかしかない。筆者も数年前まではこのことを少しも知らなかった。知るようになった事情については後に記すことにして、今回、国士館百年史編纂事業のための『国士館史研究年報 楓原』を創刊するに当たり、国士館と嘉納との関係を調べる機会が与えられた。本論文の目的は、出来る限りこの関係を明らかにし、このテーマ研究の端緒を開くことである。そ



嘉納治五郎
（東京文理科大学・東京高等師範学校『創立六十年』より）

こで、なぜ、いつごろ、どのような形で、どのような程度、嘉納は国士館教育に関与したのであるか、などの概



嘉納治五郎先生（国士館名誉教授）を囲んで

1929（昭和4）年の国士館専門学校創立の春、嘉納治五郎が「講道館柔道と文化」と題して講演後の記念写真。中央に嘉納先生、その左に山下義韶九段、右に会田彦一六段、左に工藤一三五段、右に村岡源八四段。（上野孫吉編著『国士館柔道 80 年史』より）

要を明らかにしたいと思う。これらのことが明らかになれば、国士館において柔道教育の原点を省みることとはもとより、同時に、国士館全体にとっても有意義なことであるといえよう。

筆者が最初に両者の関係に気づいたのは、二〇〇二（平成一四）年のことであった。当時筆者は大学院人文科学研究科で国際教育関連の科目をも担当しており、中国からの留学生（胡穎氏）がこの科目を選択した。彼女のテーマは嘉納が創設・運営した清国留学生のための日本語教育施設「宏文学院」の教育についてであった。筆者は教育学者として嘉納の教育者の側面に関心があり、横山健堂の『嘉納治五郎先生傳』（講道館、一九四一年）を所有していた。しかし読んではいかなかったため、この機会に中国からの留学生とこの書を読もうと思い立ち、大学院事務室で一部をコピーしていたところ、通りかかった福本正幸大学院課長（当時）がこの書を見つけ、嘉納が国士館の柔道教育に直接関与していたことを知らせてくれた。福本氏はかつて国士館大学の学生時代に柔道部で活躍し、そのことを知っておられたのである。その根拠を求めると、彼の恩師である上野孫吉・国士館大学体育学部名誉教授編著『国士館大学柔道八〇年史―国士館を創った人々と柔道の歴史―』（国書刊行会、一九九九

年)を示してくれた。この書には嘉納の写真はもとより、一九二九(昭和四)年に、嘉納が国士館専門学校創立の春に講演を行なったときの記念写真などが添えられており、実際に嘉納が国士館教育に係わったことが判明した(写真参照)。そこで、直接上野名誉教授(元国士館大学柔道部部长)に二〇〇七年二月にインタビューした。氏は快く応えて下さり、嘉納が義務的ではなく、積極的に国士館における柔道教育担当に応じたことを話してくださった。氏は彼の恩師で、嘉納から直接薫陶を受けた会田彦一元教授などから嘉納と国士館との関係を聞かされていたのである。

このような事情を経て、嘉納と国士館の関係について執筆する機会が与えられたので、短期間ではあるが、主要な史料に眼を通し、嘉納と国士館との関係を明らかにしたいと思う。相互の書簡や当時のさらなる記録を探すゆとりがないが、将来、どなたかがさらに詳細にこのテーマを追求するためのきっかけとなれば幸いである。

嘉納がなぜ国士館教育に積極的に関与するに至ったかの背景には、彼が本来教育者であり、学校教育に熱意を抱いていたことがある。そこでまず、嘉納の教育者としての本質を浮き彫りにすることに力を注ぎ、嘉納の人格を分析してそれを基礎に構造的にこれをとらえる

方法をとる、その中で、嘉納と国士館との接点を探る。史料としては、前記・上野孫吉氏の書があり、教育者としての嘉納に関しては、長谷川順三著『嘉納治五郎の教育と思想』(明治書院、一九八一年)と、教育史専門の加藤仁平著『新体育学体系第一七卷「嘉納治五郎」』(逍遥書院、一九八二年)とがある。前者の著者は、嘉納が長期にわたり校長職を務めた(東京)高等師範学校の後身・東京教育大学体育学部及び同大学大学院教育学研究科を修了し、また、教育大学の後身である筑波大学教授(野外教育、社会教育・社会体育の専門家)を勤めた人物であり、後者は、東京高等師範学校で嘉納の直接の薫陶を受け、京都大学で教育学を修め、東京文理科大学及び東京高等師範学校で教鞭をとった人物である。これらに、横山健堂『嘉納治五郎先生傳』(講道館、一九四一年)や、嘉納先生伝記編集会『嘉納治五郎』(講道館、一九七八年)などを使用する。特に、長谷川の著書には、嘉納が直接記した『柔道』などの機関誌中の文章や、嘉納の口述筆記「嘉納治五郎自伝」が載せられてあるが、これらを項目ごとに自伝としてまとめたものが嘉納治五郎『嘉納治五郎—私の生涯と柔道—』(日本図書センター、二〇〇六年)があり、基本史料となる(文中では「自伝」として示す)。

一 教育者・教育改革者としての嘉納治五郎

一般に嘉納治五郎といえば「柔道の創始者」と反射的に連想するように、嘉納が柔道家であることは間違いないことではあるが、彼の性格と生涯の歩みを知ると、彼の本質が「教育者」であつたことが浮き彫りにされてくる。そのことは先に挙げた文献などで再三強調されているが、一般にはそのことがほとんど浸透していない現状である。嘉納自らが教育者としての自分を知っており、教育者としての自己の天分を率直に語っている。

「自分は性来人を教へることに興味を有して居たので、幼少の時分、四書の素読を教はつてゐた頃、親類の自分より更に年少のもの共を集めて、いろいろの文字を書きぬいて教へたこともある。又、東京に来てから、大学の学生時代にも、下級のもののいろいろの本を講義したこともある。自分にとつては、人に物を教へるということが一種の楽しみであつたのである」¹⁾

と語り、大学で嘉納は政治・理財科を卒業したのに、他の多くの卒業生が望む官庁に就職せずに、学習院に奉職した理由を述べている。

1. 学習院教員・教頭時代

二二歳で東京大学文学部を卒業し、哲学科の選科生であつた二三歳のとき（一八八二「明治一五」年）華族会館設立の、華族の子弟を教育する学習院（のち宮内庁所管）に政治学と理財学を教える教師として勤めることになった。以後八年間、学習院にあつて講師、教授補、教授、幹事兼教授、教授兼教頭となつて学習院の教育に当たり、同時に改革を実行した。当時、華族は徳川時代の元藩主など身分の高い家系の子弟が在学しており、教師が生徒に遠慮がちであつたり、生徒が教師を軽蔑していたりして、教育の効果が上がらなかつたのを嘉納は不満とし、自らが生徒の中へ入つて指導すると共に、生徒の封建的な身分の差を取り上げ、選科を作つて学力の弱い者の学力を強化し、華族以外にも優秀な者を入学させ、切磋琢磨して学習する環境を作り出した。嘉納のこうした学習院改革があつたればこそ、明治三〇年代に学習院に学んだ武者小路実篤や志賀直哉らの「白樺派」による文芸運動が起きたのであろう。

学習院の教師になつた一八八二（明治一五）年に、二三歳の若き教育者・嘉納は自ら他に三つの教育的事業を起こしている。

一つは後世にまでつながる柔道教育のための「講道館」

の創設であり、二つは家塾としての「嘉納塾」の創設、そして三つ目は文学の学校「弘文館」の創設である。

2. 講道館・嘉納塾・弘文館の創設と運営

嘉納は現在の神戸市東灘区御影町の灘の酒造家の第五子三男に生まれ、家庭と寺小屋で学んだ後、一八七一（明治四）年、一二歳のとき東京在住の父の下へと上京し、両国の生方桂堂の書道塾（成達書塾）に入学し書道を中心に学ぶと共に、箕作秋坪の英語私塾に入り、英語を学ぶ。一四歳のとき、本格的に洋学を学ぶために学課のすべてを英語で教える育英義塾に入ったが、翌明治七年試験を受けて東京外国語学校英語部に転校、翌八年一六歳で諸藩の更進生（諸藩派遣の優秀生）の集まる大学校所轄の開成学校に入学し、外国人教師から法科・理科・文科などの西洋の学問を学ぶ。育英義塾のときも、開成学校のときも、腕力の強いものにいじめられるなど、嘉納は学業は優れているのに、腕力での非力を痛感し、これを克服しようと師を求めて柔術修行を始める。一九歳で東京大学で政治・理財を専攻し、傍ら二松学舎で夜間に漢学をも学びつつ、三つの流派の奥義を究め、これらを合わせてついに柔道を編み出し、大学を卒業し学習院の教師になった時に柔道を教える「講道館」を設立した。

嘉納は若い頃、柔術に励むことによって非力を克服したのみか、痼癪もちをも克服し自制的精神が向上したことを実感し、それを知育・体育・徳育にも、また、社会生活にも応用できることを発見し、人格形成と社会人形成の基礎となる道^③があるとして、これを「柔道」と名づけた。後年この思想は柔道における「精力善用」と「自己共栄」という、柔道による自己形成と社会平和への哲学へと結実する。このように見てくると、嘉納の講道館は、武術を学ぶ所という観念を大きく超えて柔道を通して人間形成の場となった。これは嘉納の教育者としての本性から生まれたものであるといえる。

家塾としての嘉納塾は、講道館創設と共に東京下谷稲荷町永昌寺で始められたもので、親戚や知人から指導・監督を依頼された者や嘉納を頼ってきた者の個人的な指導にはじまり、やがて人数が増え、規則を設けて、労働を導び、困難を忍び、克己、勤勉、努力の習慣を養う、人格練磨の場とした。この塾は大正八年まで約三八年間続いたのであり、嘉納の教育事業の大きな部分を形成した。

やはり講道館や嘉納塾と同じ頃に設立された「弘文館」は、一八八九（明治二二）年、嘉納が欧州視察旅行に赴くまでの八年間ほど続いた、文科系の私立学校であった。

多数の教師が参加したが、嘉納自身がもっとも多くの時間を受け持ち、ここでも教育者としての天分を発揮した。

このような若き日々の教育経験は、官立の諸校の校長を努めたときに、教育者としての能力を発揮する土台となっている。

3. 第五高等中学校・第一高等中学校校長時代

嘉納は三名の学習院院長（立花種恭、谷干城、大島圭介）に信頼され、学習院の運営を任されていたが、明治二二年になって三浦梧楼中將が院長に就任すると、当時の国家主義・国粹主義を体现し、華族・士族・平民の区別を明らかにする三浦の教育方針と対立し、海外視察の名目で教頭職を免じられる。嘉納三〇歳のときである。アジア経由の欧州旅行は明治二二年九月から二四年一月までであり、「教育を主として諸般の視察を遂げ」た。⁽⁴⁾ 嘉納はこのときの事情についてこう述べている。

「自分は、大学において政治学・理財学を卒へ、学習院でも最初さうした学科を教授したが、元来、教育に興味を有していたのである。処で、学習院において幹事として又、教頭として職務を尽くしている間に、益々教育の尊重すべく、且又其偉大なるものであるといふことを感得するに至った。此度欧羅巴に行く以上は、政治・理

財よりか、むしろ、教育をしらべようという志を起こしたのである」⁽⁵⁾。

嘉納はまた、宗教にも関心を持ち、欧州で宗教の様子を観察したが、キリスト教の衰えを実感し、「嘉納としてはこの旅行を通して、断然宗教を捨てて教育第一主義におちつくことになった」⁽⁶⁾。

嘉納の不在中に学習院と文部省との間で話が進められ、帰国後、嘉納三三歳の時、熊本第五高等中学校校長職が待っていた。彼は二八九一（明治二四）年四月に学習院教授免職と同時に文部省参事官（文部大臣は芦川顕正）に就任し、七月に結婚。平山校長死去により八月に第五高等中学校任命、九月就任というめまぐるしさの中で、単身熊本に赴き校長職に就いた。

予想に反し、当時の第五高等中学校は、施設は立派であったが予算が貧弱で有力な教師を集めることもままならない状況であり、在職中に政府部内で財政の都合上、この学校を廃止しようとの内儀が起こったほどであった。嘉納はこれに断固反対し、教育の中央集権の弊害を指摘し、高等中学校の大学予備校的性格に反対し、⁽⁷⁾ 存続を訴える意見書を提出したのみか、逆に、九州大学創設を提唱するなどの積極策を訴えた。特筆すべきは、在職中に島根県中学校の教師をしていた小泉八雲（ラフカ

デリオ・ハーン）をこの学校の英語教師として招いたことである。前任の外国人英語教師がやめたためではあるが、嘉納は修行時代に英語学を習得していたために、八雲のすぐれた英文学の力を知っていて八雲を招いたのではなからうか。八雲の給料は松江中学校時代の倍になった。これは九名の家族を抱える八雲にとって好条件であった。八雲は嘉納からよい印象を受けた。八雲は

嘉納校長から柔道の説明を受けて、力を持って力て對抗せずに、相手の力を利用して相手を倒す柔道が東洋精神の真髄を体现していると感嘆し、海外にこれを紹介するに至っている⁸⁾。武芸の盛んな熊本において、講道館館長の嘉納は全生徒の渴仰の的となり、教師を掌握し、嘉納は第五高等学校に道場を作り柔道を教えた上、熊本講道館を開設した。しかし、明治二六年一月の東京出張の際に、「修身教科書機密漏洩事件」が文部省内で起こり、

大臣官房図書課長の澤柳政太郎が引責辞任をして謹慎生活に入ることになり、教科書の検定事務が著しく滞るといふ事態が発生していた⁹⁾。嘉納は当時の河野敏鎌文相や久保田譲文部次官などに図書課長就任を要請されたが、高等学校の教育に魅力を感じていた嘉納は一旦断るものの、教科書検定のほかに学制改革にも参与してほしいという説得を受け入れ、転任を決意し、惜し

まれつつ熊本を去る。わずか一年四か月の第五高等学校校長職であったが、嘉納の学校改革は大きな影響を残している。

文部省における嘉納は、大学、高等学校、高等師範学校等から学者を依頼し、嘉納自身も奮闘努力し、わずか数か月の間に山積していた教科書検定の後始末をすませ、学制改革にも意欲を燃やした。折から河野文相が没して井上毅が文部大臣になり、牧野伸顕が次官になり、東京の第一高等学校校長・木下広治が文部省の専門学務局長になるに及び、井上文相と木下らが嘉納の第一高等学校校長就任を要請した。嘉納は図書検定の仕事有一段落したのを機会に、快くこれに応じ、一八九三（明治二六）年六月に高等学校校長兼文部省参事官に就任した。

第一高等学校といえは、全国から秀才が集まるナンバースクールであり、その校長となることは教育者として最高の榮譽であった。しかし当時の第一高等学校に對して、嘉納は自治主義が行き過ぎて、「正しき自治の精神に基づける学校の制裁によらず、生徒各自が勝手に制裁を加ふることが度に過ぎ、自治の精神を誤っており（中略）その寄宿舎内の清潔・整頓は甚だ不行届きであったが如きは、決して善い教育の跡とは受け取れなかつ

た¹⁰」と批判している。江戸時代の塾では、人数も少ない上に、塾生は塾主の人格や専門を慕って来ており、また、先輩格の塾頭などが塾生を監督・指導していたのに、近代学校制度下の学校では、そのようなことがないので、江戸時代のような生徒の自治性は適切ではない、校長自らが学生を薫陶すべきである、という意見を嘉納は抱いていた。嘉納はわずか三か月しか校長として在籍しなかったのであるが、第一高等学校の放任的自主主義の教育を改めるべく努力を重ねたのである。

4. (東京) 高等師範学校校長時代

嘉納が第一高等学校の校長に就任してわずか三か月後、学校改革に意欲を燃やしていた矢先に、突然、井上文相から、高等師範学校校長の高嶺秀夫が急に退任することになったので、その後任になってくれなにかとの要請を受けた。嘉納は当時第一高等学校と文部省参事官という二つの役職を担っており、三職を兼ねるのは重荷であるのだが、心身ともに旺盛なとき(三四歳)であったので、引き受けることにした。実際にやってみると大変であることがわかり、第一高等学校の方を嘉納を補佐していた首席教授・久原躬弦にゆだねることにして、高等師範学校の校長職に専念するにいたった¹¹。

嘉納は三四歳のときの明治二六年九月に高等師範学校に就任し、四年間校長職を勤めた後、明治三〇年に二か月間ほど非職となり、三一年に退職、一九〇一(明治三四)年、四二歳で三度返り咲き、一九二〇(大正九)年一月に六一歳で退職するまで、「足かけ実に二六年(正味二三年四か月)に及ぶ¹²」長い間、しかも働き盛りの三〇歳台から五〇歳台を通して高等師範学校教育に従事した。それゆえ「高師の嘉納か嘉納の高師か」といわれるほど、嘉納の高等師範教育への影響力は深く及んだ。高等師範学校とは、当時、中等教育教師養成の唯一の専門機関であって、「教育の本山」的性格を持っており、嘉納はまさに教育職の中の最高の教育職を生きたのである。嘉納が教育者といわれるゆえんがここにもある。なお、一九〇二(明治三五)年に師範学校の制度改革があり、高等師範学校は「東京高等師範学校」への校名変更があった。

この時代の嘉納の業績は、(東京) 高等師範学校の質的改革と量的拡大である。

当初は文学科・理化学科・博物学科の三学級、生徒数わずか合計八〇数名、教授数一五名にすぎず、経費も貧弱で図書費もわずかであった。これを、文・理の二分科制とし、従来の在学年限三か年を四か年に改め、科目目

を充実させ、入学資格を師範学校の卒業生のみから、尋常中学校の卒業生にまで広め、優秀な生徒を入学させることに工夫を施した。さらに、専修科制を導入し、国語・漢文専修科と英語専修科を設置した。また、大正四年には体育科を設置し、その結果、嘉納が退職する一九二〇（大正九）年には、在学生数七二四名に達し、多数の卒業生は全国の中学校長、高等女学校長、師範学校長に就任するに至った。高等師範の年限延長問題では、木場貞長・普通学務局長の反対に会い、嘉納は井上文相のもとをしばしば訪れ、意見をたたかわせ、深夜にまで及ぶところがあるなどして実現にこぎつけた。¹³

嘉納が高等師範学校在籍中、一九一七（大正六）年から一九一九年まで我が国初めての内閣総理大臣直属の教育全般の審議機関「臨時教育会議」が寺内内閣での岡田良平文部大臣の下で開催された。嘉納は平田東助総裁、久保田讓副総裁下の四〇名の教育関係権威者の一人として選ばれ、とくに高等師範学校の大学への格上げを目指す「師範大学案」を提出し、教育者養成の重要性を訴えて大演説の「獅子吼」¹⁴を行い、孤軍奮闘した。委員の多くは師範学校の重要性について認識が薄く、大学と名づけることへの抵抗も強かった。そこで高等師範学校に専攻科を置き、年限も延長して大学と同等の科目を置き、教

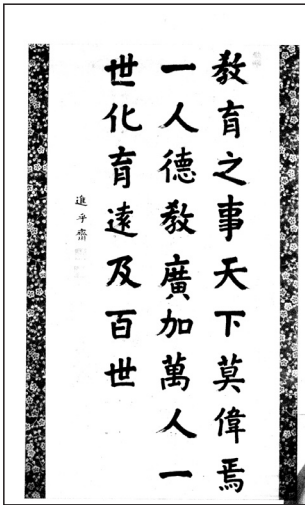
授陣を充実させ、設備を改良するという妥協案が浮上し、嘉納はこの案を受け入れざるを得なかった。大正七年七月二四日の高等師範学校の改革に関する答申では、教員の待遇改善と教員の増加や生徒への給費の復活と並んで、「研究科及び専攻科はこれを常設とする」ことが示され、高等師範学校が「師範教育を持って特殊の任務とする」と同時に、「特殊専門の学科」に関する精深な研究を可能ならしめる方策を示した。¹⁵一九二九（昭和四）年には東京・広島両高等師範学校に「文理科大学」を付置することになった。これは大学への昇格の意味があるが、嘉納は文理科大学がアカデミックな性格が強く、嘉納が意図した「教育精神」を養い「実践的」である大学ではなかったために、これに対して不満があった。

嘉納はまた、一八八六（明治一九）年に「学校令」を設定し、我が国における学校制度の整備・発展に寄与したかつての文部大臣・森有礼（一八四七—一八八九）の、師範学校に兵式体操を導入する方策に対して強く反対し、高等師範学校でこれを廃止するという英断を下している。

嘉納は森が大いに師範教育に心を注ぎ、東京師範学校を高等師範学校と改めるなどの功績があったことを認め、た上で、師範学校に対して素人考えて兵式体操を奨励し、

軍隊教育のごとく教育者を育成しようとしたことを強く批判した。「教育事業そのものを楽しんで職にあたることが教育者の魂である」とし、この精神を顧慮せず、魂を入れない形式主義のあり方に強い疑問を呈した。そして「自分は高等師範学校校長就任以来、訓育は大いに重んじたが、兵式の形のごときは格別注意は払わぬことにした⁽¹⁷⁾」のである。

ところで、嘉納は、師範教育の意義について、その重要性について解き明かしている。「国家の盛衰から見ると、政治・産業・軍事、必ずしも常に永続しない。併し教育は、一人の人のなせる事が、其一生の間にさへ何万人にも其力を及ぼし、更に、其死後、百代の後までも其力を及ぼすことが出来る。其意味を自分は、次の語にあらはし、屢々人に示した。」⁽¹⁸⁾



嘉納先生伝記編纂会
『嘉納治五郎』講道館より

教育之事天下莫偉焉、一人德教広加万人、一世化育
遠及百世

とし、この精神を師範教育で徹底的に養うことが重要であるとした。また、転じて、教育事業を大いに楽しむことが必要であると説く。教育の仕事は、自分が力を尽くしたことが、教育を受けた者に満足を与え、父母兄弟からも喜ばれる。ただし漫然とするのではなく、適切に手段を選び、相手が理解できるように教育することが肝要である。そして自らが範を示すことが大切である、と説き、次の言葉を残している。

教育之事天下莫楽焉、陶鑄英才兼善天下、其身雖亡
余軍薫永存

これらの言葉は嘉納の精神を伝えるものとして、講道館に今もなお伝えられている（写真参照）。嘉納が本質的に教育者であることを如実に物語るものである。

嘉納の高等師範学校在職中に、教授陣に一流の学者を集め、また、付属小・中学校を充実させ、中等教育研究会を設立（明治四一年）するなどの功績があり、中等教

育研究会会長として諸学校の連結、雑誌発行、協議会の開催などの目覚しい働きがあった。そして、教え子たち英才は、多くの分野で名をなし活躍するに至っている。

また、(東京文理科大学・東京高等師範学校)『創立六十年』(昭和六年)は、嘉納が高等師範学校において、貧弱であった体育を改め、柔道、剣道、各種運動競技を奨励し、運動会を設立し、体育科を設置したこと、大日本体育協会を創立し、オリンピック運動にまい進したことなどの功績を列挙し、顔写真を一頁全体を使って掲載している。嘉納の高等師範学校教育への功績は、校史においても第一級のものとして扱われているのである。

5. 留学生教育

嘉納が高等師範学校校長を勤めた初期の一八九六(明治二九)年当時、文部大臣兼外務大臣であった西園寺公望から清国(現中国)の留学生受け入れを頼まれ、留学生一三名を受け入れた。日清戦争で破れた清国は、近代化の遅れを痛感し、日本に留学生を送って近代化を進めようとしたのである。嘉納は高等師範学校の一教授に留学生の教育を依頼し、日本語、日本語文法、普通科の教授を開始し、明治三年には「亦楽書院」と命名、次第に留学生数が増え、明治三五年には発展拡大して「弘文

学院」を創設、後に「宏文学院」と改名し、多くの留学生を受け入れ、中国人留学生受け入れの先鞭をつけた。開校する一九〇九(明治四二)年まで一三年間に、後の小説家・魯迅を含む七〇〇〇名の留学生を受け入れ、松本亀次郎をはじめとする熱心な教師陣による工夫ある日本語教育が施された。嘉納は優秀な日本語教師を集めると共に、「自他共栄」の東亜民族共栄を理想として、学校を運営し、自らが二回も清国に赴き、日中友好のために努力した。その結果、中国に帰国した留学生たちが新学校を創ったり、新知識を伝えるなど、その後の中国の近代化の担い手として活躍した。嘉納が上海滞在中に、宏文学院出身者が彼を慕って続々集まり(一説に三五〇〇名)、盛会になったという。⁽²²⁾

嘉納の教育精神は、日本国内を越えて国際的に広がっていったのである。

6. 体育の促進とオリンピック運動への参画

嘉納の東京高等師範学校における体育の育成・充実は顕著なものがある。その代表的なものが従来の文科・理科に加えて体育科を設けたことである。嘉納の就任以前は、「体操専修科」が設けられており、体操指導者の育成が行なわれていた。ただ、実際にはほとんど体操の

みを中心としており、武道も他のスポーツも採用されてはおらず、体操の教師は各学校教師の下位に置かれていて、地位が低かった。一八九九（明治三二）年の改正で体操専修科に副科として柔道と剣道の二種が加えられ、また、明治三五年の改革で体操教師としての人格養成に重きを置く処置を行い、大正二年の改革で武道の正課採用が認められると専攻を「体操」「柔道」「剣道」に分けた。一九一五（大正四）年に「高等師範学校規定」が改正されて、文科・理科のほかに（特科としての）体育科が設置された。さらに、体操専修科時代の学習年限三年間から文科・理科と同じ四年間に延長された。大正一〇年に「特科として」の文言が取り除けられ、完全に他の二科に並立されるに至るまで、体育科はその地位を向上させたのである。嘉納は単に柔道の育成発展にのみ尽力したのではなく、水泳や陸上競技などスポーツ全般にわたってその発展に努めた。

このような嘉納の働きを知ったオリンピック再建者クーベルタン男爵は、嘉納にオリンピック委員の白羽の矢を立て、一九〇九（明治四二）年に駐日フランス大使ゼラールを通して、国際オリンピック委員就任を要請した。嘉納はこれを受諾し、日本最初の国際オリンピック委員になった。「共存共栄」思想の持ち主の嘉納は、ほ

ぼ同じ年齢のクーベルタン (Pierre de Coubertin, 1863—1937) の「オリンピックで重要なことは、勝つことではなく、参加することである」と語ったその精神に共鳴し、オリンピック運動にまい進する。

嘉納は日本にオリンピック参加選手を育てるべく、東京帝大、早大、慶大、明大、一高などの協力を得て、「大日本体育協会」を結成し（明治四五年規約制定）、事務所を東京高等師範学校内に置き、陸上競技、水泳、サッカーその他の競技を奨励し、大いにスポーツの発展に寄与した。嘉納が日本スポーツ界の父といわれるゆえにある。嘉納はオリンピック委員会やオリンピックに参加するために何回も海外へ赴き、オリンピック運動に励んだ。嘉納の若いときに鍛えた英語力も大いに役立つと共に、スポーツ競技を通しての世界平和実現への情熱が嘉納を動かし、支えたのである。一九三八（昭和一二）年、カイロでのオリンピック委員会に出席し、第一二回東京オリンピック開催決定を土産に日本に向け帰国中、嘉納は太平洋上の秩父丸船中で病を得て没した。五月五日、七九歳のときであった。嘉納の体育への功績は東京高等師範学校後身「筑波大学」で今も語り継がれ、嘉納治五郎生誕一五〇周年記念事業として、シンポジウム（二〇〇九—二〇一〇年）や「高等師範学校—嘉納治五

郎と高師教育―展（二〇〇九年十二月、筑波大学体育芸術中央棟体育ギャラリー）などが学長を実行委員長として開催されている。

7. 教育者の魂

嘉納はこのように柔道を通して、体育・スポーツを通して、教育精神を発揚し、日本国内はもとより、世界に大きな教化の働きを残した。学習院や高等学校の校長から、文部省での勤めと改革、講道館での指導と、嘉納塾などでの指導を通して青年を教化したのみならず、宏文学院を運営し日清の友好に寄与し、造士会を創り（明治三〇年）、金曜会を興し（大正八年）、また、講道館文化会を結成して（大正一一年）、嘉納が会得した人生哲学「精力善用」「自他共栄」の精神を広めて社会一般を啓蒙し続けた。このように学校教育、体育、教育行政、国際教育、社会教育など、広い範囲にわたって教育活動に献身した一生であった。

ドイツの教育学者で精神科学的了解（理解）心理学者シュプランガー（E. Spranger, 1882—1963）は、その大著『生の諸形式』（Lebensformen, 1921）において、人の人格を、体格や心理テストではなく、人の持つ価値観によって分類し、「あなたは何を価値としているか

を告げよ。さらばあなたの性格を告げん」と述べた。その価値とは、経済的価値（利益や効率優先の価値観）、認識的価値（真理探究を優先する価値観）、美的価値（美や調和の追求を優先させる価値観）、権力的価値（力やリーダーシップを優先させる価値観）、社会的価値（人への愛や献身を優先させる価値観）、そして聖なるものを優先させる宗教的価値観の六つである。被教育者の成長のための献身、すなわち教育愛は、社会的価値観に相当する。医者、看護師などと共に、教育者は、人への関心と愛と献身を特性とし、これらの価値を優先させる存在である。別な言い方をすれば、人が幸せになるときに、はじめて自分が幸せを感じた教育者ベスタロッチのようなタイプが教育の魂を持った人である（ドイツの著名な教育学者ケルシエンシュタイナーも同じく述べている）。

これまでの嘉納の教育的思想と教育への情熱と業績を見ると、嘉納は、柔道という専門を通して青少年を教化した、中等教育段階における優れた教育者であった。そして、嘉納の人格の本質は、人類の教化者という広い意味を含めて、教育者の魂そのものであり、彼の一生はその輝きを放った生涯であったということが出来る。

次に、このことを前提として、国士館と嘉納の接点を見ようと思う。

二 国士館と嘉納治五郎

国士館と嘉納との関係は、人物的にかわりと、理念的にかわりの両者がある。

1. 人物的にかわり

国士館大学名誉教授で、柔道部長として長年、学生との教育と柔道指導に当たってこられた上野孫吉氏（一九二五—）編集・執筆の『国士館大学柔道八〇年史—国士館を創った人達の歴史—』（図書刊行会、平成十一年）の中に、嘉納治五郎の写真と共に、国士館専門学校創立時（一九二九「昭和四年」）、嘉納が来館し「講道館柔道と文化」と題する講演を行なった時の記念写真が載せられている（写真参照）。さらに、別頁（八一頁）に、国士館専門学校初代柔道部長・山下義韶（やましたよしかず）や第二代柔道部長の飯塚国三郎（八七頁）の写真と略歴が掲載されている。

山下義韶（一八八四—一九三五）は、神奈川県小田原市の士族の家に生まれ、東京帝国大学嘱託、警視庁柔道世話係、慶応義塾の柔道教師などを歴任、一九〇三（明治三六）年に渡米し、アメリカ合衆国第二十六代大統領・

セオドア・ルーズベルトら二〇〇名余に柔道を指導、ルーズベルトは山下を師と仰ぎ尊敬した。また、アメリカ海軍兵学校の正課に柔道が採用されるにいたり、三年間アメリカに滞在して、アメリカに柔道を根づかせ、また、日米友好に多大な功績を残した。帰国後山下は、警視庁柔道世話係に復帰、講道館指南役、高等師範学校、宮内庁警察部、早稲田、国士館などで柔道教師を勤め、また、大日本士道会を創設、七一歳で亡くなった際に、多年講道館柔道に貢献した功績で、嘉納から十段を追贈された。山下は講道館で最初の十段となった人であり、講道館「四天王」の一人と言われた。⁽²⁵⁾ 山下は嘉納の五歳年下で、嘉納が開成学校生徒時代に生活を共にし、二松学舎塾生時代に共に漢学を学んだ、兄弟のような間柄であり、アメリカでの成功を嘉納は我がことのように喜んだという。山下死去での「永訣の辞」で嘉納は亡き山下に感涙むせぶ次のような言葉を贈っている。⁽²⁶⁾

「君は予の門下にあること五〇年、其の間終始一貫講道館の事業を助け以って柔道の発展に貢献したり。明治一七年始めて予の門に入るや、夙に頭角を顕し、二〇歳にして既に各地より集まれる柔術の諸大家と角逐して常に優秀の技量をしめせり。明治二十二年我が海兵学校に於いて初めて生徒に柔道を課するや、君は初代の教師とし



晩年の山下義韶（松本芳三（代表）
『柔道の百年の歴史』講談社より）

て赴任しよく其の任務を尽くせり。其の他東京帝国大学・警視庁・慶応義塾・東京師範学校・早稲田大学・皇宮警察部・国士館専門学校等、東京における殆ど総ての重なる道場の教授に任じ其の成績を挙げたるのみならず、又遠く海外に出でて柔道を指導し柔道の世界的普及の端緒を開けり。

今日講道館は国内においては柔道の充実を図り、海外に対しては其の宣伝普及を策するの大方針の下に館員一同の一致協力を要望せり。この時に当て君の如き予が特に信頼せる講道館最高段の門下を失いたるは予の最も遺

憾とする所なり。茲に於いて君に贈るに左の旗頌を以てせんとす。

九段 山下義韶

常ニ予ノ教旨ヲ守リ柔道ノ形乱取ヲ修メ技熟達ニ至レリ又終始一貫其道ノ普及ニ努メ 其ノ成果国内ニ遍ク遠ク海外ニモ及ビ其ノ功績極メテ顕著ナリ今ヤ幽明界ヲ異ニス茲ニ永訣ヲ告グルニ当テ特ニ十段ヲ贈ル

昭和一〇年一月二十四日

嘉納は彼の愛弟子・山下義韶を国士館専門学校初代柔道部長として、国士館に送ったことは、嘉納が国士館での柔道教育にいかに関心し力を入れていたかを物語っている。他にも飯塚国三郎らの優秀な弟子たちを国士館に送っているが、紙面の関係でその詳細を記しえない。『柔道』二〇一〇年一月号（本橋瑞奈子「講道館十段物語・第五回」）は、飯塚国三郎について詳しく掲載している。上野孫吉・国士館名誉教授・元柔道部長は、彼の柔道の師・飯塚国三郎、会田彦一、斉藤武雄ら嘉納の直弟子から聞いた言葉として、筆者にこう語ってくれた。

「柴田が学校を創った。オレが行く」

上野八段によると、最初の一年間は嘉納は国士館専門学校名誉教授の肩書きであったが、直接国士館に赴いて

柔道の指導を行なったという。また、彼の高弟たちを国士館に送り込んだと述べた。実際、山下のみならず、高弟・飯塚国三郎十段（教授・第二代柔道部長）、会田彦一九段（教授・柔道部長）、斉藤武雄八段らの高段者が国士館の柔道指導に送られたのである。

では、嘉納を国士館専門学校での柔道指導を依頼した、国士館創立者・柴田徳次郎（一八九〇—一九七三）は柔道とどのような関連があったのであろうか。

柴田は早稲田大学に入学すると、故郷・福岡出身の集まる「筑前学生会」を通して、早稲田大学柔道部の宮川一貫四段を知り、柔道部に入学し、「宮川四段、田中健介三段に真剣に稽古をつけて貰い、寒稽古には、大寒の朝二時に起き、四時までに（牛乳）配達を終え、前夜の握飯を懷中にして、二里（約八キロメートル）ある戸塚の道場へかけつけ、満三年皆勤、卒業の時には、当時学生の最上級三段になった」。

このように、柴田は学生時代に柔道修行に打ち込んだのであり、当然、柔道の創設者・嘉納へ尊敬の念を抱いていたであろう。また、嘉納は柔道に励んだ柴田に親近感を抱いたに違いない。そして、約三〇歳年下の柴田を息子のような感覚で接したかもしれない。柴田がいよいよ本格的に文武両学の専門学校を創設することを知るに

及んで、嘉納は「柴田は本気だな」と受け取ったのではなからうか。

2. 理念的かかわり

理念のかかわりを求めるに当たり、まず国士館と嘉納治五郎の接点を求めて、国士館専門学校創設にいたる歴史を概略する必要がある。

国士館は、一九一七（大正六）年に東京麻布の大民団事務所内に「國士館」夜学塾が開かれたことに始まり、「国士館設立趣旨」には、物質文明の弊害を除き「精神文明と精神教育」を唱導して、「国家の柱石たる真知識を養成し」「膝を交えて親しく活学を講ずるの道場」を開くこと、そして、「大正維新の松陰塾」を旨指すとしている。学科目は、政治、社会、宗教、哲学、武道、外国語などであった。大正八年には財団法人国士館を設置し、「国士たるべき人材」の育成を目的とし、中等教育程度の卒業者を入学資格とする修業年限三年間の学校・高等部を置き学校教育に乗り出す。学科には、「訓練（修身）」「知識（実際）」「材料及発表」の三柱からなり、国体論、歴史、哲学及思想史、財政及経済、法学、漢文、宗教、軍事、英会話、武道が並んでいる。さらに大正一二年四月に文部省規定に準ずる中等教育機関として、小学校（六

年間）男子卒業者に五年間の普通教育を施す「国士館中等部」を開設、修身、国語及漢文、外国語、歴史、地理、数学、博物、物理及化学、法制経済、図画、体操・武道と法定どりの科目が置かれたが、「体操・武道」が毎週二時間ずつ多く、これが教育上の特色のひとつになっていた。このように、国士館教育は、当初から武道を重んじ、いわゆる文武両学の日本の教育の理想を実現しようとした痕跡が認められる。一九二六（大正一五）年には、時代の要請に応えて、「実業学校令」に基づく修業年限四年の勤労青少年を対象とする夜間の「国士館商業学校」を設置した。

そして、一九二九（昭和四）年に、「中等教員の養成」を主たる目的とする「国漢剣道科・柔道科」からなる「国士館専門学校」を設置するに至る。本科は修業年数四年で生徒定員数は四〇〇名、研究科は本科卒業後の進学課程として位置づけられた。全学に渡り「武道」関連科目が毎週一四時間ずつ、「国語」と「漢文」は合計一六時間配当され、生徒は剣道か柔道のいずれかを専攻することになっていた。この専門学校設置に至って、文武両学の理想が完全な形で実現したのである。昭和四年当時に体育を専門とする専門学校は他に「大日本武道専門学校」（明治四〇年設立）と「日本女子体育専門学校」（大

正一五年設立）しかなく、国士館専門学校は日本で三番目に設置された体育系（武道）の専門学校であった。²⁸さらに特徴として「武道並ニ訓育」のために全寮制がしかれており、これは学校に塾的性格を与えていた。当時の専門学校は、中学校・高等女学校卒業者を入学資格とする「高等ノ學術技芸ヲ教授スル」学校であり、今日の大学に匹敵する。そして同年の専門学校・大学・高等学校などの高等教育機関在学者の該当年齢人口に占める割合は、三パーセント未満（男子約四・三パーセント、女子約〇・五パーセント）であり、専門学校まで進学する者は極めて少数であった。²⁹しかもこの専門学校は、他の国士館の付置校がいずれも早い時期に廃止されているにもかかわらず、昭和三〇年三月まで続いたのであり、戦前から戦後一〇年間にかけて二五年間以上存続した基幹校であったといえる。

ところで嘉納は柔道を教える講道館を作って後進の指導に当たったのであるが、「柔道」というその名のとおり、単に技術を教えるのではなく、柔道の修行を通しての青少年の人格形成、人間性の養成を目指していた。そのために嘉納塾を経営し、塾生に文化的教養を身につけさせようと願った。さらに、成蹊塾、善養塾、全一塾をも作っている。このことは、嘉納の根幹的教育方針が日本古来

の「文武両道」の理念を継承していたことが明らかである。その意味から柴田の設立した「文武両学」の国士館専門学校は、両者が教育理念を共有していたことを示している。嘉納が国士館専門学校に寄与したいと思った理由がここにあったのだといえよう。

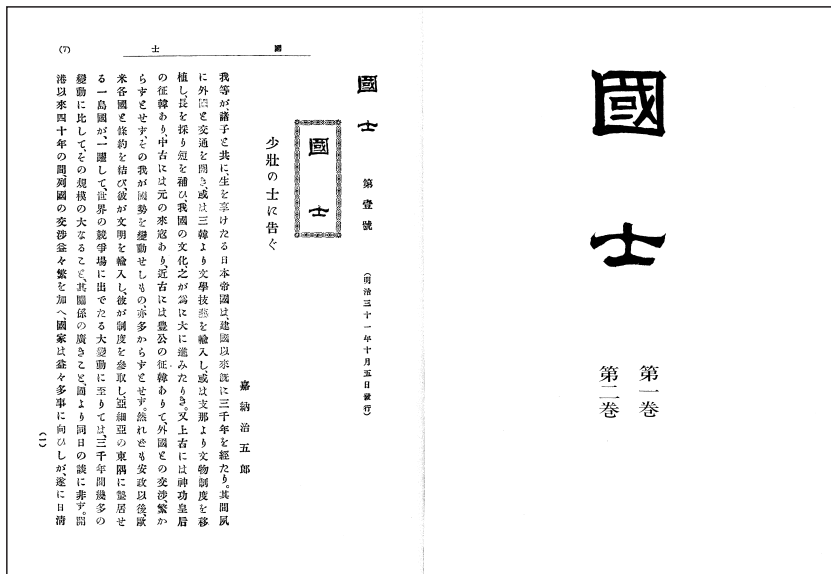
嘉納は若くして学習院の教員になり、また、講道館を設立した一八八二（明治一五）年に、文科系の私立学校「弘文館」を同時期に設立した。ここに嘉納が学校を創り運営したいとの強い願望が伺われる。ところが学習院を辞める流れのなかで欧州旅行をすることになった一八八九（明治二二）年を境に、弘文館を閉校せざるをえなくなり、学校経営の道が途中で途絶えてしまった。政府の依頼で一八九六（明治二九）年に開校した清国留學生のための日本語教育機関「宏文学院」も、国際情勢の変化で一九〇九（明治四二）年に閉校になった。それ以来嘉納は社会啓蒙運動のための造士会、金曜会、講道館文化会などを創り精力的にこれらを運営したが、これらは学校ではなかった。壮年期には、高等師範学校校長などの公職にはげみ、晩年は体育の育成や国際オリンピック委員会での活動など多忙であり、学校経営と言う嘉納の夢はかなえられることはなかった。

そこへ、学生時代に柔道に励んだ柴田が、文武両道理

念の学校を創ったことを知るに及び、嘉納が自分の果たせなかった夢を実現しているものとして、国士館専門学校で柔道を教えることに強い意欲を持ったことは想像にたたくない。この学校はまた、教育者の養成を主たる目的にしていたのである。それゆえに「柴田が学校を創った。オレが教えに行く」という積極的な言葉となり、かつ、愛弟子の山下義韶や飯塚国三郎などの優秀な弟子を国士館に送り込んだのであるといえよう。

いずれにせよ、これまで指摘してきたように、嘉納が本質的には青少年の教育者であることが、同じ青少年の文武両道による教育を行なおうとする柴田と国士館専門学校とを結びつけた根本的な要因であったといえよう。しかも当時の国士館専門学校は、人格教育主義、鍛錬主義の全寮制をとり、嘉納塾のそれと本質的な教育方針を共有していた。そのことは「国士」を頂く校名に顕れている。実は嘉納が一八九八（明治三一）年に創った「造士会」の月刊機関誌名が『国士』であったのである（写真参照）。この機関誌は、造士会が終わる明治三六年まで続いた、青年のための修養的雑誌で、嘉納の論説をはじめとする諸名士の論説、雑録、質疑応答、彙報などかなる堂々たる啓蒙誌であった。

嘉納自らが記した「造士会創立の趣旨」に、時勢を憂



造士会『国士』

い国民の奮起を促し、指導者養成の必要性を訴え、次のように述べている。

「而して人力を進むるは、固より学校教育に待つ所多しと雖、殊に必要なは、各人をして天賦と時勢とに応じ、国家の公に拠りて其精力を活動せしめるにあり。此希望に副はんとするには、各人個々の趨く所に放任せず、之を正当に指導するものなるべからず。而して後始めて能く其望達するを得ん。此希望に副ふ所の人は、吾人之を国士といふ。国士を得るは容易ならずと雖、吾人の望む所は、実にかかる国士を以て、自ら期せんことを希ふの士を養成するにあり。」⁽³⁰⁾

この後の文で、学校教育を補うものとしてこの雑誌を出すことが語られている。要するに「国士」とは、志を持つて国家・社会を善導する優秀なリーダーのことを意味するのである。「国家の柱石たる真知識を養成し」とする国士館設立趣旨と共通する概念であるといえる。

嘉納と柴田は年の差三〇歳と離れてはいたが、また、嘉納が若いときに英語や洋字を学び、西洋の合理主義思想を身につけてはいたが、「文武両道」「鍛錬主義的教育方針」「塾的教育」「非形式的的人格主義教育」「国士の養成」「教員養成」という教育理念において共通するものを持っていた。そして個人的には、柔道を通して共通の基盤を

持っていた。嘉納は自分の果たそうとして果たしえなかった学校経営を、柴田が国士館専門学校で実現しようとした意気に感じ、一肌脱ぐ気持ちを抱いたに違いない。青年への文武両学的人格教育という絆で、嘉納と柴田の国士館とは固く結ばれていたということが出来る。

註

- (1) 長谷川純三「教育家としての嘉納治五郎」『嘉納治五郎の教育と思想』(明治書院、一九八一年)一頁。
- (2) 加藤仁平『嘉納治五郎』(『新体育学体系一七 嘉納治五郎』(逍遙書院、一九八〇年)七九頁。
- (3) 長谷川純三「柔道家としての嘉納治五郎」前掲註(1)三頁。
- (4) 同前、八頁。
- (5) 前掲註(2)九二頁。
- (6) 同前、九六頁。
- (7) 前掲註(1)二二頁。
- (8) 前掲註(2)一〇四頁。
- (9) 教科書の検定制度時代の明治二五年に、教科書会社が文部省に自社の修身教科書を持ち込んでいたところ、検定の標準と現時点での検定合格の一覧が或る新聞記者によってスクープされ、大さわぎになった

た事件で、澤柳は一月に依願退職した。

- (10) 前掲註(1)七頁。
- (11) 嘉納治五郎『私の生涯と柔道』(日本図書センター、二〇〇六年)二四四頁。
- (12) 嘉納先生伝記編纂会『嘉納治五郎』(講道館、一九七七年)一九二頁。
- (13) 前掲註(2)一一六―一二七頁。
- (14) 横山健堂『嘉納先生傳』(講道館、一九四一年)二二頁。
- (15) 同前、一三三頁。
- (16) 文部省『学制百年史』(帝国地方行政学会、一九七二年)四九八―四九九頁。
- (17) 嘉納治五郎『私の生涯と柔道』(日本図書センター、二〇〇六年)二四八頁。
- (18) 前掲註(1)八頁。
- (19) 前掲註(14)一三四―一三八頁。
- (20) (東京文理科大学・東京高等師範学校)『創立六十年』(東京文理科大学、一九三一年)二四〇―二四二頁。
- (21) 胡頴「嘉納治五郎の教育思想と宏文学院の教育実態に関する一考察―清朝末期における中国人日本留学生教育の一段面として―」(国士館大学大学院・人文科学研究科修士論文、平成一七年度)四九頁。

- (22) 前掲註(2) 一三五頁。
- (23) 前掲註(1) 五〇頁。
- (24) 前掲註(14) 九七頁。
- (25) 本橋端奈子「講道館十段物語・第一回・講道館最初の十段 山下義韶」(『柔道』第八〇巻第四号) 一〇一～一八頁。工藤雷介「講道館七人の十段」(『柔道名鑑』日本柔道新聞社、一九六五年)。
- (26) 上野孫吉編著『国士大学柔道八〇年史―国士館を創った人達と柔道部の歴史―』(国書刊行会、一九九九年) 八四～八五頁。
- (27) 国士館大学創立六十周年記念同窓会・記念出版編集委員会『国士館大学創立者柴田徳次郎伝―信念と気魄の生涯―』(国士館大学同窓会、一九七八年) 二九頁。
- (28) 湯川次義「母校の歴史を振り返る」(『国士館大学に学ぶ(2)』国士館大学、一九九一年) 四七～四八頁。
- (29) 同前、四六頁。
- (30) 造士会『国士』第一巻第一号(講道館、一八九八年)。

参考文献

- ・上野孫吉編著『国士館大学柔道八〇年史―国士館を創った人達と柔道部の歴史―』国書刊行会、一九九九年

- ・加藤仁平『嘉納治五郎』(『新体育学体系一七 嘉納治五郎』逍遙書院、一九八〇年)
- ・嘉納治五郎『私の生涯と柔道』日本図書センター、二〇〇六年(大滝忠夫編『私の生涯と柔道』新人物往来社、一九七二年)
- ・嘉納先生伝記編集会『嘉納治五郎』講道館、一九六四年

- ・工藤雷介編『柔道名鑑』日本柔道新聞社、一九六五年
- ・工藤雷介編『柔道名鑑』柔道名鑑刊行会、一九八九年
- ・胡頴『嘉納治五郎の教育思想と宏文学院の教育実態に關する一考察―清朝末期における中国人日本留学生教育の一段面として―』国士館大学院・人文科学研究科修士論文、平成一七年度

- ・国士館大学創立六十周年記念同窓会・記念出版編集委員会『国士館大学創立者柴田徳次郎伝―信念と気魄の生涯―』国士館大学同窓会、一九七八年

- ・シュプランガー(伊勢田耀子訳)『文化と性格の類型』(Lebensformen, 1921) 明治図書出版、一九六七年
- ・ケルシェンシュタイナー(玉井成光訳)『教育者の心』

- (Die Seele des Erziehers und das Problem der Lehrerbildung, 1927) 協同出版社、一九五七年

- ・東京文理科大学・東京高等師範学校『創立六十年』東

京文理科大学、一九三二年

・造士会『国士』第一巻第一号、講道館、一八九八年

・中村良三「本誌（柔道）の今後について」『柔道』第

七九巻第五号、講道館二〇〇八年

・長谷川純三編著『嘉納治五郎の教育と思想』明治書院、

一九八一年

・松本芳三編集（代表）『柔道百年の歴史』講道館、一九

七〇年

・本橋端奈子「講道館十段物語・第一回・講道館最初の

十段山下義韶」『柔道』第八〇巻第四号、講道館

・本橋端奈子「講道館十段物語・第五回・一押し二引き

三かわせ、技は力の花とこそ知れ 飯塚国三郎」『柔道』

第八一巻第一号、講道館

・文部省『学制百年史』帝国地方行政会、一九七三年

・湯川次義「母校の歴史を振り返る」『国士館大学に学

ぶ②』国士館大学、一九九一年

・横山健堂『嘉納先生傳』講道館、一九四一年

嘉納治五郎の教育活動表（付国士館関連事項）
 岩間浩作成

年	年齢	公職	兼職	会（雑誌）	講道館	その他の塾	嘉納塾	その他学校	備考
一八八二（M15）	23	学習院教員・教授・教頭					嘉納塾運営	弘文館運営	
一八八三（M16）	24								高弟・山下義韶
一八八四（M17）	25								警視庁柔道世話になる
一八八五（M18）	26								師範学校令
一八八六（M19）	27								
一八八七（M20）	28								
一八八八（M21）	29								
一八八九（M22）	30	第1回欧州視察旅行							
一八九〇（M23）	31								○柴田徳次郎生まれる
一八九一（M24）	32	（熊本） 第五高等学校校長	文部省 参事官						
一八九二（M25）	33	文部省図書課長							
一八九三（M26）	34	第一高等中学校校長							
一八九四（M27）	35	高等師範学校校長 （一八九七年九月から一、二か月非職）						弘文学院（のちの宏文学院）	日清戦争
一八九五（M28）	36								
一八九六（M29）	37								
一八九七（M30）	38								

一八九八 (M 31)	一八九九 (M 32)	一九〇〇 (M 33)	一九〇一 (M 34)	一九〇二 (M 35)	一九〇三 (M 36)	一九〇四 (M 37)	一九〇五 (M 38)	一九〇六 (M 39)	一九〇七 (M 40)	一九〇八 (M 41)	一九〇九 (M 42)	一九一〇 (M 43)	一九一一 (M 44)	一九一二 (M 45)	一九一三 (T 2)	一九一四 (T 3)
39	40	41 42	43	44 45 46 47 48 49 50	51 52 53	54 55										
東京高等師範学校校長（明治三五年に高等師範学校から名称変更）																
文部省 普通学 務局長	清国視 察	国際 オリン ピック 委員	←													
造士会『国士』	←															
講道館 館長	←															
成蹊塾 善養塾 全一塾	←															
嘉納塾運営	←															
宏文学院運営	←															
山下義韶渡米	日露戦争	○柴田徳次郎早稲田大学入学 ○柴田徳次郎ら青年大民団結成 第一次世界大戦勃発														

一九二七 (S2)	一九二六 (T15) ／ (S1)	一九二五 (T14)		一九二三 (T12)	一九二四 (T13)		一九二二 (T11)	一九二一 (T10)	一九二〇 (T9)		一九一九 (T8)	一九一八 (T7)		一九一七 (T6)	一九一六 (T5)	一九一五 (T4)	
68	67	66		65	64		63	62	61		60	59		58	57	56	
ロンドン出張						第7回オリンピック参加(アントワープ)											
←															国際 オリン ピック 委員		
←															柔道会『柔道』		
←															『有効な活動』		
←															講道館文化会『大勢』		
←															講道館文化会『柔道界』		
←															『柔道』		
←															講道館文化会『作興』		
←															講道館長		
←															嘉納塾運営		
←															第一次世界大戦終了 嘉納ら「金曜会」を設立 ○国士舘高等部開校		
←															臨時教育会議 ○大民団夜間 国士舘開校		
←															○国士舘中等部開校		

一九二八（S3）	オリンピック国際委員会列席	国際オリンピック委員	講道館文化会『作興』	講道館館長	○国士館専門学校開校 嘉納治五郎、国士館名誉教授として柔道指導／山下義韶十段、初代柔道部長
一九二九（S4）					
一九三〇（S5）	71		講道館文化会『柔道』		
一九三一（S6）	72	第10回オリンピック（ロスアンゼルス）参加			満州事変勃発
一九三二（S7）	73				
一九三三（S8）	74	オリンピック誘致のため渡欧			
一九三四（S9）	75				山下義韶死去
一九三五（S10）	76	国際オリンピック会議に列席（渡欧）			
一九三六（S11）	77				
一九三七（S12）	78	オリンピックカイロ会議列席			日中戦争勃発
一九三八（S13）	79	5月帰路の船上にて死去（79歳）			

(註) 機関誌の変遷については講道館発行の『柔道』第79巻第5号(平成20年5月)を参考にした。